

ウドンコ病

…溝口喜代美



わが家はイチゴをつくっています。昨年の秋はウドンコ病が大発生して弱りました。

直売もしているのですが、農薬はあまり使いたくない。でも、消毒しなきゃウドンコで減収。どうしたらいいでしょう…。

最近、農薬の使用回数や残留農薬の問題などに対して、消費者から厳しい声が発せられるようになった。また、私にも孫が三人いる。ハウスに入ってきては、イチゴをとってそのままパケツと口に入れる。だから農薬はなるべく使いたくない。

私、イチゴづくり三八年の七〇歳

ご相談への答えになるかどうか、昨年から試しているケイ酸の葉面散布の結果を紹介してみたい。

七五〇倍で

一〇日おきに散布

ケイ酸は、ケイ素・酸素・水素からなる化合物だ。ケイ素は野山のスキの葉に多く含まれていて流水に溶けて流れて来るし、酸素と水素は水の成分そのもの。これらの化合物であるケイ酸も農薬ではないが、このところ「特定農薬」なんてものを定めるの、定めないのといっている。普及センターに相談してみたところ、所長がいうには「農薬ではないから作物への使用はさしつかえない」とのことだった。

使用開始は、昨年九月二十日から。葉面散布用のケイ酸（販売先・ロイヤルインダストリーズ株TEL〇三三三四九一四〇八）を選んで、当初は週に一回散布。その後、果実が大きくなって白熟し始めてからは一〇日に一回かけている。

ケイ酸の散布は、晴天になることを確認して早朝五時頃から始める。私のハウスは、天張りビニールを年中被覆したままなので、早朝でも朝露の心配がないからやれる。

ビニールを落とさないのは土を雨に打たせたくないからだ。台風のとぎだけ、それも大型台風のとぎだけしか落とさないことにしている。

濃度が濃いと白い粉が少し残って目立つから、希釈倍率は七五〇倍とした。一〇a当たり二〇〇lの水に溶かして使う。展着剤はミツバチに影響するの



ウドンコ病が出たイチゴ(倉持正実撮影)



昨年10月25日時点の私のイチゴ。周囲ではウドンコ病が出ていたが、まったく発生の気配なし

で使わない。花粉が粘って八チの脚にたくさん付くので、重すぎて弱ってしまっただ。展着剤の代わりに、木酢液を二〇〇倍、キトサンを一〇〇〇倍くらいに薄めて混ぜている。

噴口は最小の穴で一〇頭口。少し圧力を上げて、葉の裏に下からすくい上げるように散布する。白熟する頃までは葉が立っているのでよくなる。

**ウドンコ発生はわずか、
出ても広がらない**

例年、十月上旬は、肥効が最高なう

え、気温も高い、湿度も高い。ウドンコ発生には三重の好条件だ。マルチを敷いて、ホツとしているあいだにウドンコの発見が遅れるので要注意。今作はケイ酸だけの予防を決意しただけに、毎日注意深く観察した。

昨年の秋は、この地域のウドンコ発生は早かったが、私のハウスにはなかなか出なかった。年が明けて一月二十日頃になってようやく一株見つかつた。ちょうど一番果の实の成り疲れで、株が弱っている最中である。二番果房の軟らかい茎に発病していた。

私は直ちに、その果房と古い果梗枝や古葉を、心葉四枚を残して取り除けた。そしてケイ酸溶液を十分に散布。

その後、三月下旬まで病斑はなし。四月に入ってハウスの入り口に少し見つかつた。しかしそれも広がる気配はない。こうした結果から見て、ウドンコの予防にケイ酸散布の効果はあつたと思つた。

被害株で実験、殺菌はできないが予防には使える

昨年の秋は、一般にはウドンコの発生が早く、隣の圃場の友人は、九月二十日頃の部会の現地講習会の折にすでに発生を指摘された。結局、一月中旬までに収穫した一番果は平年の半量しかなかったと嘆いていた。

私は、その友人から、クスリの実験に使つからといって被害株二株をもらつてきた。まだ、自分の圃場ではウドンコが見つからなかつた頃だ。ウドンコを発病してからケイ酸がどの程度効くか調べようと考えたわけだ。被害株二株をハウスの換気扇下に植え付け、マルチも敷いて実験を開始した。

その後の一回目のケイ酸散布で、玉の表面の白い粉はとりあえず落ちた。だが、玉の下部のマルチに接したところには少し残っていたので、再度、玉を持ち上げて散布した。以降は、ほかのイチゴといっしょに一〇日間隔で定期散布を繰り返した。

この被病株二株にも、ウドンコの白い粉の再発はその後ない。しかし病紋だけは残った。実が熟してきたので試食してみると、病紋の部分は少し硬くて口に残った。そしてウドンコ特有の味。実内部の組織の中に菌が食い込んでいたようだ。やはり、ケイ酸で殺菌まではできない。予防のために使うべきと思う。

花びらを乾燥させて 灰色カビ病も予防

結局、四月八日時点で殺菌剤は一度も使わずにすんでいる。まだ作が終わったわけではないが、これから病気が多発することはあまりないので、このまま使わずにすむのではないか。

ケイ酸は、灰色カビ病の発生も抑えるようだ。福岡県のこのあたりは、冬になると山陰型の気候となつて、曇りや雨天が多いので、ハウスの換気が悪いとたちまち灰色カビが多発する。落ちてマルチに張り付いたままになつた花びらにまず灰色カビの菌がついて繁

殖し、これが実に移行してくる。花びらが媒介するわけだ。

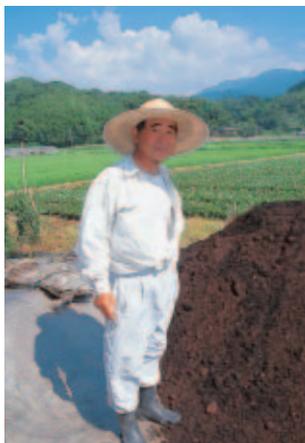
ところがケイ酸には乾燥剤の効果がある。海苔やお菓子に入れて使うシリカゲルの乾燥剤といつしよだ。ケイ酸溶液を散布していると、まず花びらの切れが早い。次に、落ちた花びらは、すぐに薄茶色に変色して縮んで小さくなつてしまふ。やがてそのまま黒変してくる。その上に肥大した玉が乗っても被病しなかつた。花びらが早く乾燥することで、灰色カビの菌を寄せ付けないということか？

ただ、今年の二月下旬から三月上旬の長雨には負けた。三番果の2L級に

灰色カビが大発生した。それで、ケイ酸が殺菌剤ではないことをあらためて実感したりした。

もつとも、もともと花数が多いから、これは適度な摘果代わりになつたという見方もできる。殺菌剤なしのイチゴつくりに手応えを感じたうえ、今年の売り上げは今のところ前年比一四〇%。ケイ酸によるウドンコ予防は成功である。

(福岡県前原市瀬戸六一七)



筆者

農薬登録情報

ウドンコ病予防にくん煙剤として使われてきた硫黄が3月5日に正式に農薬登録された(細井化学工業・三光化学工業)

適用作物はイチゴ・キュウリ・メロン。使用量は、床面積10a・高さ2mの空間当たり6~16g。ハウスなど密閉可能な場所で、専用の電気加熱式くん煙器で利用することが条件となる。